

未来ノート

-202Xの君へ-

水泳

おおはし ゆい 大橋悠依



彦根イトマンに通っていたころの大橋悠依＝父の忍さん提供。パシフィック選手権女子400メートル個人メドレーで金メダルを獲得した大橋悠依＝9日、池田良撮影

遅咲きスイマー

日本一楽な練習

人生初の暗黒期

可能性を信じて

6歳「最初はアイスメアテ」

最上段まで埋まったスタンドに観客の大歓声が響く。9日にあった競泳パシフィック選手権女子400メートル個人メドレー決勝。大橋悠依(22)ライトマン東進はゆったりとした泳ぎで後続をぐんぐん引き離

し、主要国際大会で自身初の金メダルをつかんだ。2位に1秒83差をつける圧勝。スタンドで見ている父の忍さん(59)は思った。「ほんまに、強くなったなあ」

大学4年になるまでほとんど無名の選手だった。滋賀県彦根市で生まれた3人姉妹の末っ子。アレルギーやぜんそくをもち、「風邪をひいては肺炎になる。しょっちゅう病院にいった」と忍さん。「少しでもせんそくがよくなれば」という思いで6歳から始めたのが水泳だった。

小学3年で全国の有望な小学生が出席するジュニアオリンピック(JO)に出たが、壁は厚かった。最初のJOは50メートル背泳ぎで152位。毎年参加したものの、忍さんは「東京に遊びに行くようなものだった」。午前中に1本予選を泳ぎ、午後はデイズニードやお台場で「東京観光」。大橋は「終わったらデイズニード、と思いつながら泳いだこともある」と明かす。

通ったのは彦根イトマン。2人の姉についていき、「最初はアイスメアテでした」と大橋は笑う。月に1回の進級テストに合格すると、ご褒美にアイスを買ってもらえるのがうれしかった。

大橋家の子育ての方針は「子どもたちの好きなことをやらせる」。両親は軟式テニスの経験しかなく、「楽しんでくれれば、ええ」。

◆「未来ノート」スクラップブックは、全国のASA(朝日新聞販売所)でお配りしています。インターネットの特設ページではイベントやスクラップブックについて詳しく紹介しています。「未来ノート 朝日新聞」で検索してください。

©朝日新聞社 無断複製転載を禁じます。すべての内容は日本の著作権法並びに国際条約により保護されています。